

序章

まちづくりの

「らま」——

いつでも、

どこでも、

誰とでも

1

まちづくりは、誰のため？

そもそも、「まちづくり」って、何？

みなさんは「まちづくり」と聞いて、何を想像し、どんなイメージをもたれるだろうか？

——街造り？ 町作り？ まちづくり？

——「地域づくり」や「まち起こし」とは何が違うの？

——ここは村じゃが、「まちづくり」でおおとる（合ってる）のか？

「まち」は、マチ、町、街などさまざまな表記がなされるし、「つくり」も、作り、造り、創りなど、どの字をつかうかでニュアンスが微妙に変わる。全国の自治体では、まちづくりに関する条例が多くあり、「防災まちづくり」や「景観まちづくり」など「〇〇まちづくり」という言い方もよく見られるようになった。

私は、もともと土木史と景観マネジメントを専門とする工学部土木分野の大学教員であり、

20年前に熊本大学に来てからは熊本県を中心に（たまたま、よその地域でも）まちづくりや地域デザインについて研究、教育、そして実践者として活動している。そんな私であるが、まちづくりにかかわっていると、冒頭の質問の続きとして、次のような声が聞かれる。

——よくわからないけど、たいへんそう

——面白そうだけど、難しそう

——いつも同じ人がやってる感じ

——まちづくりって、何か得するの？

——昔かかわったことがあるけど、たいへんだった

まちづくりは、何のため？

もう少しだけ「まちづくりは、何のためにあるのか？」ということについて考えたい。私は、都市計画や地域計画、景観計画、文化財保存活用計画、総合計画など、何かしら公共的な計画づくりの文脈で、しかも役所など公共側として、まちづくりにかかわることが多いのだが、そのような場で聞かれる言葉には、次のようなものがある。

——意見だけ聞いて、どうせやらないでしょう？（熊本では「帳面消し」というらしい）

——前にも同じようなことをしたのに、どうして「また」やるの？

——いつになったら、終わりますか？

——どうして「みんな」でやらなきゃいけないの？ ひとりでやっちゃダメなの？

——総論賛成、各論反対

高齢社会を迎え、あちらこちらで人手不足が叫ばれるなかで、いったい何のために、まちづくりは必要なのだろうか？

そもそも、まちづくりは面倒くさいもの、やらなくてもいいことをやっているようにも見える。でも、まちづくりをしている人たちを見てほしい、笑顔の人が多く、つらそうな顔の人はいない。底が抜けた社会、孤立する人びと、損得勘定が支配的な現代において、一見無駄と思われるような遊び、余白、がまちづくりでは大切にされている。

いつでも、どこでも、誰とでも、あなたが自分たちの暮らしをよりよくしたいと思ったならば、それがまちづくりのスタートだ。まちづくりとは、みんなのため、誰かのため、そして自分のために、誰もが参加でき、多様な主体がかかわり合って、地域社会の環境や経済、そして文化を継承し、アップデートしていく終わりのない協働活動である。

本書では、誰と、どのようにまちづくりをしていくのか。それぞれの土地で、どのような時間を過ごし、どのような空間を設^{しづ}えて、どんな仲間とつながっていくのか。みなさんと一緒に考え、そして誰もが幸せを実感できるような解をともにつくっていききたいと思う。

2

「まちづくり」とは言わない、まちづくり

変わらないために、変わり続ける

世界的な気候変動により頻発する激甚災害やCOVID-19などのパンデミック、さらには戦争や紛争などによって政治・経済が不安定になり、数年前までは当たり前だったことが、あつという間に当たり前ではなくなってしまう。こうしたなか、まちづくりに求められているのが、2030年を目標年次に見据えた世界的な取組みであるSDGsの考えの根幹となるサステイナブル（sustainable）だ。

「持続可能」と翻訳されるこのサステイナブルとは、いったいどんな状態なのだろうか？ もう数年後に迫った2030年の世界だけを指しているのではないだろう。持続性とは、あることがらがずっと変わらずに続いていること。また、その事象が終わってから、「よく続いてきたね」と評価することを「持続性がある」という。では、持続性に「可能」という言葉がくつついた持続可能性とは、何だろう？ 「可能性」という言葉は、その事象が始まる前に「ながく続く」といいな」と事前評価するような意味合いを感じさせる。

研究室でゼミ生たちと、持続可能性についてディスカッションしていた時、「では、サステイナブルの反対ってどんな状態？」という話になった。誰かから「一度きり？」という声があがった。すると別の学生が「一度だって、やってみただから、サステイナブルには近づいているのではないか。サステイナブルの反対は、何もしないことなのでは？」というアイデアが生まれた。このやり取りの際に、ふと頭をよぎったのは、マザー＝テレサの「愛の反対は何？」という問いだった。「愛の反対は、怒りや憎しみではなく、無関心である」と彼女は説いた。であれば、サステイナブルの反対も無関心ではないか。

このサステイナブルと対で用いられる言葉がレジリエンス (resilience) である。日本語では近年は強靱性と訳されるが、必ずしも直接的、物理的に強いだけではなく、粘り強さ＝靱性、

回復力を備えていることが大切である。

人や社会、生態系などは本来、変化を望まない。特に、人はうまくいつている時や忙しい時、あるいは何事かを成し遂げた人や、管理する側の人びとは変化を好まない。「変化に向き合う」レジリエンスには、二つの力が考えられる。一般的にレジリエンスは、災害など極端な変化に対して、人びとの暮らしや産業が破綻しないように、大き過ぎた変化を許容範囲に減衰させ、元に戻すための「抵抗力」として認識されていると考えられる。しかしレジリエンスは、私たちの日々の暮らしにおいては、硬直化した社会に変化のきっかけを与え、マンネリ化した社会をアップデートする「駆動力」にもなることを知っておいてほしい。

本書では、サステイナブルを単に「持続可能性」と訳して、わかったことにしてしまうのではなく、レジリエンスと対の概念として考え、変わらないことも変わっていくことも、両方大切、「変わらないために、変わり続ける」意志ある選択であると考え。そのために松尾芭蕉が言ったとされる「不易流行」、すなわち変わらないことと変わっていくことは不即不離、どちらも大切であり、その動的平衡（バランスィング）が重要である、という立場をとる。

まちづくりの出発点

平仮名5文字の「まちづくり」が一般化したのは、1980年代初期と言われている。1960年代以降の高度経済成長とはうらはらに、急速に悪化した都市問題や公害問題に対して、まずは反対を表明する「反対運動」と呼ばれていた草の根の社会環境改善活動が、環境や社会に対する地域住民の自治に基づいた他者の共感を得る地域活動へと変化するなかで、都市計画の一部として「市民参加」の重要性がうたわれたことがその契機とされる。

まちづくりには、従来「よそ者、若者、馬鹿者」が必要と言われてきた。長年地域の風土に根ざして継承されてきた本質的な価値は、それを「当たり前」に享受してきた地域住民だけでは気づきにくい。地域住民の自治に基づきながら、考え方が違う他者をも受け入れながら、話し合って暮らしていくには、「よそ者（この地域に好んで入ってきてくれた者）、若者（地域コミュニティの一員だが、経験が乏しく失敗が許される者）、馬鹿者（地域コミュニティの一員だが、特異な能力を有する者）」というステークホルダーの役割が大きかった。

「日常」というのは、毎日同じようなことが同じように繰り返される。代わり映えがしないし退屈に感じてしまう。しかし、同じことを同じように繰り返すことは、実は難しい。同じ時代、同じ場所で暮らしていても、人はそれぞれ別の時間を生きている。そもそも、全く同じ体験など、しようと思ってもできないのである。

まちづくりとは、多様な主体がかかわり合って、地域社会の環境、経済、そして文化を継承しアップデートしていく終わりのない協働・実践である。子どもたちは学ぶこと、大人は働くこと、普通に暮らすことも「まちづくり」であると私は考えている。地域における暮らしの主人公は自分たちであり、まちづくりを「自分ごと」として捉えたい。

3

まちづくりの三つの時間あひ ——時間・空間・仲間

新しい一期一会を

まちづくりとは何かについて、もう一つ別の言い方をしてみよう。まちづくりとは「一期一

会」、すなわち、ある時代、ある場所に集った仲間たちによる場づくりの積み重ねである——と。

「場」は日本特有の概念だそうだ。そして、場は、時間・空間・仲間の三つの「間」から成るとされている。時間は、過去から未来に一樣に流れ、後戻りはできない。同じ時間、同じ空間にいる仲間でも、一人ひとりの時間の感じ方は違う。空間についても、同時に全く同じ空間をシェアすることはできない。そもそも、違う主体が同じ空間を体験することは厳密にはない。仲間についても、当然全く同じ主体などいない。

時間・空間・仲間に共通するのが「間」である。「間」は、文化の問題であり、地域によって異なることが一般的だ。

「時間」については、時刻 (time) とタイミング (timing) の話があり、特に地域性がよく表われる。約束の時間に間に合うように到着したところ、誰もその場にはいなくて、まわりに聞いてみると、彼の地では約束の時間に家を出て集合するのが当たり前、のような時間感覚を共有している国や地域もある。海外に行くとき時刻表どおりに電車やバスが来なくて困ったなどの話をよく聞くが、日本の公共交通の定時運行性は有名である。関西では、「ボケとツツコミ」と言われるように、会話のタイミングが重視される。蕎麦屋の出前ではないが、「もうすぐ着き

ます」の「もうすぐ」とは、どれぐらいの時間を指すのか。蕎麦を待つほうと、届けるほうの時間の流れ方は違う。

「空間」については、昼の「京間」、江戸間」などサイズの違いや、車の右側通行、左側通行など、これも国や地域によって差異がある。文字の縦書き、横書きや着物の右前、左前などは、身体性と空間とのかかわりを示すものだが、相撲の東西やお雛様の並べ方、などは文化性がより優位に表われた地域による空間の序列を示していて面白い。これが上下、となると洋の東西を問わず、「上」が偉い、となる。通常、神様は仰ぎ見るものだ。しかし、神様を見下ろすように拝殿がつくられる「下り宮」というものも存在する。

「仲間」についても、「じゃ、いつもの」とトランプや花札などのローカルルールや、待ち合わせ場所、時間、あるいは会の締め方など、あらゆる「間」について何らかの緩いローカルルールを共有しつつ、場に即した価値を分かち合えるコモンセンスが必要とされる。

これら三つの間を紡ぎ合わせ、一つの場とするには手間がかかることだ。

そこで、間という関係性を表わす言葉を、「間」に改めてみたい。「あわい」は、「会ふ」が名詞化した「あはひ (ahahi)」が現代では「あわい」と表記されたものであり、濃い・淡いの「淡い」と同じ発音である。間は主体間に存在する関係性ではあるが、ギャップであり、隙間

である。間は何度も関係性を確かめ合うことで、重ねることができ、濃くすることができ、時間・空間・仲間のそれぞれの関係性をより理解しやすくと考えられる。本書のまちづくり、場づくりでは、時間・空間・仲間を間という概念からとらえることとする。

まちとは、時間・空間・仲間という三つの間から成る、小さな場の連なりであり、間の連続体である。まちづくりとは、このような場において、ワクワクしながら暮らすこと、三つの間を感じて、誰かとともに生きていくことと言える。間を一人ではなく誰かと「ともに」、利他的に、いつかのため、よそのため、誰かのために手間をかけ紡ぎ続けることであり、そして巡り巡って自分のためにまちづくりはある。

分かち合う、まちづくりのために

直感的であるが、最近のまちづくりで大切なのは、「ともにゆるむ」ことだと思っている。時間・空間・仲間の間がよく見えず、手がかりのない状況で「失敗してはいけない」と緊張してしまうと、何が成功で何が失敗かもわからず、そもそも挑戦することをやめてしまうだろう。誰かが誰かを「許す／許される」という作用・反作用的な関係性ではなく、「ともにゆるむ」

という「ともにある」状態が、まちづくりにはちょうどいいのではないか。そうやって、ゆるむことができる場を、まちなかでもつ。そうした居場所をつくることを目指すのであれば、まちづくりが自分ごとになりやすい。

「みんな大切にしていることは、人それぞれ」と言う。私も、そう思う。しかし本当に「それだけ」だろうか。「情けは人のためならず」という言葉のつかい方が、近年誤用のほうが定着しつつあるという。「情けをかけると、その人（情けをかけられた側の）成長を奪ってしまうから、情けをかけるのはよくない」というのが最近の解釈だそうだ。しかし、原義は「情けは他者のためではなく、自分のために（多少の手間はかかっても）かけるもの。だから、情けはかけましょう」ということなのである。

まちづくりは、誰かがやってくれる、自らやるのは損という類いのものではなく、一人ひとりが当事者なのだ。みんな、それぞれにやりたい「まちづくり」があるはず。全く同じ、などということはないが、自分と同じようなことを大切に思っている人もきつといるはず。一人ではできなかったことも、誰かと一緒だったらできるかも。喜びも悲しみも、みんなで分かち合えば、もっと豊かな社会になるだろう。

まちづくりは、一人でも始められる。しかし、長続きしないことが多い。いつでも、どこで

も、誰とでも始められるサステイナブルなまちづくりのために、すべての人びとの暮らしを支えるインフラを語ることから始めたい。

地域「らしさ」を 支えるインフラ

第1章